心の目

連載エッセイ㉔③ 札幌かに本家社長 日置 達郎

『愛知用水の歴史 ①』

愛知用水は岐阜県加茂郡八百津町から始まり知多半島の南知多町までつながる水路で、昭和三六年九月三〇日に通水されました。農業、工業および上水道用の水を供給する用水として既に五十年以上の歳月を経ており、知多半島はじめ周辺の島々の生活用水の供給源としてなくてはならない存在であり続けています。

幹線水路は一一二km、支水水路に至っては一〇一二km の長さで、これは名古屋から鹿児島に至る距離とほぼ等しいものです。しかしながら、これだけのものを作り上げた背景や、そこに携わった関係者の労苦など私たちはあまり詳しく知らないのが現実です。当たり前に恩恵だけいただき、そこに至る先人のご苦労やご努力を見過ごし感謝の念を忘れているとしたら、人として恥ずかしいと反省する必要があるかもしれません。

さて、まずは愛知用水を作るに至ったその背景から紐解きたいと思います。

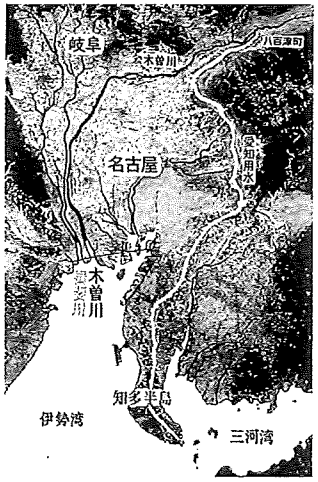
名古屋に隣接する知多半島が、かつては慢性的に水不足に悩む乾いた大地であったということを、ご存知ない方も多いのではないでしょうか。飲み水は井戸からの取水に頼っており、井戸からの主婦の水汲みと水運びは負担の大きな日課となっていたようです。もちろん、好きなだけ使えるわけではなく、皿洗いやお風呂など倹約が常だったでしょう。飲める水が取水できればまだいい方で、日照りが続くとすぐに塩辛くなって飲めなくなる有様。今では考えられないほど、水は命に関わる大切な資源だったのです。

また、農業用水を確保するために多くの溜池はあったものの（一万三千程）堀りが浅く、少し日照りが続けば直ぐに干上がる状況だったようです。特に今からおよそ七〇年前の昭和二二年、知多半島を襲った大干ばつの被害は大きく、ため池の水も無くなり、お米がほとんど取れないなどの様相を呈したようです。

こんな状況を見るに見かね立ち上がったのが、久野庄太郎という人物でした。

久野庄太郎氏は明治三三年、知多郡八幡村（現知多市）に農家の長男として生まれました。幼少のころから農業を手伝っていた久野氏は、家業を継ぎながら農学や遺伝などについても学び、農業改善や農村問題に取り組むなど幅広く活動しました。また組合や委員会などを作ることで、後の卸売市場の設立にもその基盤づくりに貢献しています。肥料をさまざまな手段で用意するなど多角的で大規模な農家となり、産業功労賞を受け、昭和二〇年には昭和天皇に御進講を申し上げる機会も得ることができました。

そんな彼が思いついたのが、木曽川から用水を引き込むという大胆な発想でした。彼は、現地を調査し関係部署回りを重ねていきます。



そして、彼の具体的な行動と積み重ねは、翌年の昭和二三年七月二一日、「愛知用水実現」に向けた大きな一歩となる一人の人物との運命的な邂逅（かいこう）へ導きます。

（次号に続く）

著者プロフィール

昭和10年、三重県津市美杉町出身
札幌かに本家チェーン代表取締役
店舗設計や庭造りが趣味。
日本飲食産業協会副会長
名古屋まつり・英傑行列
第十代徳川家康役

平成28年4月1日発行
月刊「なごやか」
4月号掲載